

平成 30 年 9 月 12 日現在

機関番号：27101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26350243

研究課題名(和文) 多様な学習者と教育目標に対応可能なレポート執筆指南の評価ルーブリック構築

研究課題名(英文) Development of Rubric-based Evaluation Forms on Academic Essays in Japanese

研究代表者

池田 隆介 (Ikeda, Ryusuke)

北九州市立大学・基盤教育センター・教授

研究者番号：60347672

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、大学生の日本語レポート執筆能力向上に貢献するルーブリック開発を目的として行われた。調査の結果、ルーブリックに次の機能があることが判明した。(1)執筆者にレポートを客観的に評価する視点を提供する。(2)体裁への配慮、文体の修正、情報の補足・充実、文章構成への意識づけを促す。つまり、ルーブリック導入が執筆能力向上に貢献できることを証明できた。一方で、「ローカライズされたルーブリックに不満を持つ大学生が出現する」などの限界も明らかになった。ここから、レポート執筆能力向上のためには、学習者にルーブリック構築の主體的な役割を担わせ「学習としての評価」を実践することが重要との結論が得られた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to develop rubric-based evaluation forms that contribute to improving the proficiency of undergraduate students' essay writing in Japanese. As a result of some investigating, it turned out that the rubric had the following functions. (1) To provide authors with a valid and reliable viewpoint to evaluate essays. (2) To promote the formatting of documents, correction of style, supplement of information, awareness of written structure and so on. Meanwhile, the limitations of the rubric such as that "not all undergraduate students could be satisfied with localized rubrics" were also uncovered. The result of this study suggests that it is important for essay writing instructors to encourage students to take the initiative in constructing necessary rubrics and practice "assessment as learning" in order to improve their proficiency in essay writing.

研究分野：日本語教育

キーワード：評価 レポート 大学生 アカデミック・ライティング ルーブリック

1. 研究開始当初の背景

当初の狙いは、多様な学習者と目的に対応可能な日本語レポート執筆指南の評価ルーブリックの構築にあった。日本国内の大学において、学習者の質の多様化が進む中、「教える」から「学ぶ」に重点を移行させた教育プログラムの改革が進められている。そのような状況下において、日本語レポートを書く力を身につけさせるための教育活動が各大学において積極的に展開されるようになってきていた。

執筆者となる大学生のレディネスは個人で大きく異なっており、また、大学・教員がレポートに求める要素も多様であった。そのため、学習者や専門の多様性を超えて利用可能な統一の評価枠組みを設けることで、レポート執筆指南を効率的に進められるのではないかと期待された。つまり、レポート執筆のための共通ルーブリックを構築し、それを活用した効果的な教授法、教材の開発を行うことが企図されていた。

2. 研究の目的

大学生のレポートを執筆プロフィシエンシーの向上に貢献するルーブリックの開発を目的に研究は進められた。当初の企画では、習者の多様性を超越して利用可能な統一の評価枠組み、つまり、日本語レポートの共通ルーブリックの構築を企図して行われていた。しかし、「執筆指南」のためには、共通ルーブリックをローカライズしたクラスルーブリックの機能に焦点を転換する必要があった。そのため、レポート執筆に関するクラスルーブリックの実践を観察し、ルーブリック活用とレポート執筆プロフィシエンシー向上がいかなる関係を有しているかを明らかにしていくための活動を行うこととなった。

3. 研究の方法

- (1) レポート執筆に取り組む大学学部生への意識調査
- (2) レポートの引用に関する実態の調査
- (3) ルーブリックを用いてレポートを評価する際の得点傾向の分析
- (4) ルーブリック導入の有無によるレポートの変化の実態の分析
- (5) ルーブリック使用に関する執筆者の意識調査

4. 研究成果

上記(1)(2)の調査の結果、日本人大学学部生のほとんどは大学学部入学以前に明示的なアカデミック・ライティングの指導を受けた経験がなく、あったとしても「論文スキーマ」が発達の途上にあった。そのため、いかなるレポートが求められているかが理解できていない状態で、理解のための手掛かりもつかめていない状態が現状であった。

そこで、多様な目的の学習者のための「レ

ポート執筆指南」という目的を達成するために、レポートを正確に評価するためのルーブリックではなく、ルーブリックがレポート執筆プロフィシエンシー向上につながり得るかという観点から研究を進めることとした。

一連の調査・実験を通じ、ルーブリックに下記の機能があることが明らかになった。まず、「3. 研究の方法」の(3)により、「執筆者にレポートを客観的に評価する視点を提供する」という機能の存在の証明につながる結果が得られた。また、「3. 研究の方法」(4)より「レポート体裁への配慮、文体の修正、情報の補足・充実、文章構成への意識づけを向上させる」という機能の存在も確認することができた。これらの機能があることから、ルーブリック導入により大学生のレポート執筆プロフィシエンシーが一定程度向上することを証明できたといえる。

ただし、課題も残る。「3. 研究の方法」(5)の調査を通じ(この調査結果については、本報告書執筆時点で投稿・審査中)、レポート評価のためのルーブリックには限界があることも明らかになった。

- ① ローカライズされたルーブリックには不満を持つ大学生も出現する。
- ② すべての要求を包括したルーブリックは大学生には理解困難となり、プロフィシエンシー向上への貢献を期待できない。

これらは、学習者のプロフィシエンシーの向上とともにルーブリックの評価項目・評価段階を更新していなければならぬという性質であることを示している。レポートのみならず、共通ルーブリックをクラスルーブリックにローカライズした場合の宿命ともいえるが、万能なルーブリックの開発ではなく、教育課程におけるルーブリックの扱い方を「プロフィシエンシーの向上」という観点から柔軟で調整可能なものとして位置づけていく必要がある。本研究では、他機関の実践例を参考に、レポート執筆指南の現場において、科目、課題、専門性などに関わらず活用可能なルーブリックを試作した(末尾の「資料」参照)が、これを唯一の指標とするのではなく、執筆者も参加しながら調整・修正を行っていくプロセスを執筆指南の現場で組み込んでいくことが重要と言える。

ニーズとレディネスが多様で、また、レポートを書く能力の成長の度合いも異なる執筆者が混在する状況においては、どのようなルーブリックであっても評価項目や評価段階への不満が生じることとなる。ただし、その不満は「正しいレポートを書くにはこのルーブリックを満たすだけでは不十分だ」という気付きでもある。つまり、学習者のレポート執筆プロフィシエンシーの向上を目的に掲げ、かつ、学習者にとって理解・活用可能であることを目指せば、学習者の成長とともに必然的に「限界」に突き当たることとなる。ルーブリックを理解し、活用し、「限界」に気づき、新たなルーブリックの作成・実践へ

の向かうプロセスを作ることがレポート執筆指南の現場においては必要となると考えられる。例えば、レポート執筆能力の向上のためには、学習者にルーブリック構築の主體的な役割を担わせるといった方法が考えられる。このように、ルーブリックそのものをゴールとするのではなく、それを活用しながら「学習としての評価」の実践へといかにつなげていくかを工夫することが今後の課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

(1)池田隆介. 大学生の日本語レポート執筆のためのルーブリック式評価表の可能性と課題. 基盤教育センター紀要. 第 30 号, pp.1-14, 北九州市立大学. 2018 年 3 月. (査読なし)

(2)池田隆介. 学術文章執筆能力の向上に貢献するルーブリック式レポート評価表—日本人大学生のレポート自己評価、及び、ピアレビューを通じて—, 第 11 回 OPI 国際シンポジウム台湾大会論文集, 淡江大学村上春樹研究センター, pp.301-309. 2017 年 8 月. (査読なし)

(3)池田隆介・水本光美. 学部留学生の就業支援のための「ビジネス日本語」: 国際環境工学部におけるケーススタディ. 基盤教育センター紀要. 第 25 号, pp.33-46, 北九州市立大学. 2016 年 3 月. (査読なし)

(4)池田隆介. 入社後の学びを見据えた理系留学生へのビジネス日本語教育. 専門日本語教育研究. 第 17 号, pp.7-10, 専門日本語教育学会. 2015 年 12 月. (査読なし)

(5)池田隆介. 工学部学部生の実験レポートにおける引用の使用実態. 基盤教育センター紀要. 第 22 号, pp.1-22, 北九州市立大学, 2015 年 3 月. (査読なし)

[学会発表] (計 5 件)

(1)池田隆介. ルーブリック式レポート評価表が学習者の執筆活動に及ぼす影響. 第 20 回専門日本語教育学会研究討論会誌, pp.22-23, 専門日本語教育学会. 2018 年 3 月 3 日. 名古屋大学 (愛知県)

(2)池田隆介. 学術文章執筆能力の向上に貢献するルーブリック式レポート評価表—日本人大学生のレポート自己評価、及び、ピアレビューを通じて—, 第 11 回 OPI 国際シンポジウム台湾大会, OPI 国際シンポジウム, 村上春樹研究センター, 2017 年 8 月 4

日. 淡江大学 (台湾) .

(3)池田隆介. 学生の疑問を起点とした文章表現指導—学部生の論文スキーマ要請に向けて—. 九州 OPI 研究会. 2016 年 6 月 26 日. 久留米大学天神サテライト (福岡県) .

(4)池田隆介. レポートにおいて出典を記載しないまま行われる引用. 第 10 回 OPI 国際シンポジウム. pp.139-142, 日本語プロフイェンシー研究会, 2015 年 8 月 2 日. 函館国際ホテル (北海道) .

(5)池田隆介. 教養教育課程の日本人学部生が抱く「論文の書き方に関する疑問」. シドニー日本語教育国際研究大会 2014. 日本語教育学会. 2014 年 7 月 12 日. <https://icjle2014.arts.unsw.edu.au/jp/program?id=876&t=ppid>, シドニー工科大学 (オーストラリア) .

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

池田隆介 (IKEDA, Ryusuke)

北九州市立大学 基盤教育センター 教授

研究者番号: 60347672

(2)研究分担者

なし

研究者番号:

(3) 連携研究者
なし

研究者番号：

(4) 研究協力者
なし

()

資料：大学生のためのレポート評価ルーブリック（案）

序論	背景	取り組むべき問題の背景について簡潔で明確な説明が行われており、議論を行う上で必要な情報を読者と共有することができる。(4点)	取り組むべき問題の背景についての説明が本論と比べて、必要情報が読者と共有することがある程度できている。ただし、簡潔さ、明瞭さ、正確さにやや不足がある。(2点)	問題の背景について説明しているように見える。しかし、説明の仕方が不十分なため、議論の土台を読者と共有することができていない。(1点)	問題の背景の説明が行われていない。(0点)
	問題提起・論旨	明確で価値ある問題提起が行われている。情報の空白を指摘し、レポートで取り組むべき課題を具体的に示す論旨が設定されている。(8点)	ある程度レポートをまとめることができず、問題提起が本論と比べて、情報の空白がある。しかし、どのような情報の空白があるのかについての言及が不十分で、論旨が明確に定まるとは言えない。(4点)	問題提起に相当する記述があるように見えるが、抽象的すぎて、どのような議論が行われるか不明。あるいは、筆者の知識不足と「情報の空白」を取り違えている。(2点)	問題提起が行われていない。(0点)
	意義	テーマ選択、論旨の設定の社会的、または、学術的意義の存在が認められる。提起した問題の解決が価値あるものであると読者に共感してもらえる。(4点)	テーマ選択、論旨の設定の社会的、または、学術的意義は述べられているものの、十分な説得力がない。(2点)	テーマ選択、論旨の設定の意義を間接的に推察できる部分はあるが、明確に提示されていない。あるいは、提示されていても読者の共感を得ることができない。(1点)	何のために執筆されたのか不明。(レポートの大きなテーマとの関連性が全く不明な場合もここに相当)(0点)
	構成予告	文章全体の構成予告を適切に行っている。(4点)	文章全体の構成予告をほぼ適切に行っている。(2点)	文章全体の構成予告を行っているが、不備がある。(1点)	文章全体の構成予告がない。(0点)
本論	詳細さ	読者を説得することができるだけの詳細な議論、豊富な情報提供が行われている。(4点)	ある程度丁寧に記述されているが、所々に説明不足がある。(2点)	説明不足のみならず、議論の飛躍や過剰な省略により、文脈を成立させるだけの記述内容が確保されていない。(1点)	必要な説明が一切行われていない。(図表のみ添付で解説がない場合、箇条書きで書いてきた場合なども、ここに相当)(0点)
	事実	先行研究や資料の探索、あるいは、独自の実験により、論旨と関係のある事実を適切に述べている。(6点)	先行研究や資料、あるいは、独自の調査を行い、論旨と関係する事実をある程度收拾することができている。(3点)	調査などを行っているが、論旨との関連性が薄く、説得力のある事実を述べることでできていない。(1点)	事実の叙述が行われていない。または、意見と事実の明確な区別ができていない。(0点)
	考察	事実を踏まえた妥当な考察ができている。(6点)	事実をもとに考察を行っているが、一部説得力に欠けることがある。(3点)	事実と考察の関係が不明瞭。または、事実として記載していない内容を根拠に考察を展開している。(1点)	考察を行っていない。または、意見と事実の区別ができていないため、どこが考察か不明。(0点)
結論	まとめ	本論で述べた議論をまとめ、説得力のある主張や提言を展開している。(4点)	本論で述べた議論をまとめ、それなりに説得力のある主張や提言を展開。(2点)	本論の内容をまとめているようにみえるが、具体的な主張や提言には至らず。(1点)	本論の内容のまとめにあたる記述が見られない。(0点)
	結論(一貫性)	論旨に対応した結論になっている。(4点)	ある程度論旨に対応した結論になっているが、具体性や、論旨と無関係な内容が、正当な答えとしては成立していない。(2点)	結論はできているが、論旨と対応していない。(1点)	明確な結論が見えない。(0点)
	今後の課題	今後の課題を適切にまとめている。(4点)	今後の課題を書いているが、記述不足や本論内容と関係ない課題が含まれていることもある。(2点)	漠然とした課題が述べられているだけで、本論での調査・検討を踏まえた反省になっていない。(1点)	今後の課題を述べていない。(0点)
全体	パラグラフ・ライティング	中心文を段落冒頭に置き、適切な支持文を添えている。段落の内容が出題の通りになっている。(8点)	中心文と支持文の区別が不十分とところがある。段落の内容がそれぞれに妥当。(4点)	形式段落はできているが、中心文・支持文が適切に構成されていない箇所が多い。(2点)	形式段落ができていない。パラグラフ・ライティングの書き方になっていない。(0点)
	文体	レポートとして適切な語彙・表現が選択されている。(8点)	レポートとして適切な語彙・表現の選択がほぼ行われている。(4点)	レポートとして適切ではない語彙・表現の使用が目立つ。(2点)	レポートとして適切な語彙・表現になっていない。(0点)
	出典	学術的に信頼できる資料を引用している。本文中の必要な箇所でも引用を適切に行っている。(4点)	一部、レポートで活用するには不適切な資料を引用している。(2点)	レポートで活用するには不適切な資料が目立つ。または、引用が必須である箇所でも引用を行っていない。(1点)	レポートにおいては根拠とならない資料のみを使っている。または、資料を収集していない。(0点)
	正確さ(ねじれ)	正確な日本語運用ができています。(8点)	文のねじれ、誤字脱字なども散見される。同じ内容の繰り返しや、過剰な省略を行っている箇所もある。(4点)	不正確な部分が目立つが、文章全体の説得力には影響するほどのミスはほぼ見られない。(2点)	不正確な部分が目立つ。無駄な繰り返しや過剰な省略もあり、説得力に影響を及ぼすミスもある。(0点)
形式	様式	指定された様式・提出方法を順守している。(8点)	指定された様式・提出方法をほぼ順守しているが、一つミスがある。(4点)	指定された様式・提出方法を順守しているが、複数のミスがある。(2点)	指定された様式・提出方法を順守することができていない。(0点)
	参考文献	参考文献(および、注)の形式を守ることができている。(4点)	参考文献(および、注)の形式をほぼ守ることができている。(2点)	参考文献(および、注)の記述はあるが、指定された形式になっていない。(1点)	参考文献の記載がない。(0点)
	引用	適切な表現で引用が行われている。(4点)	ある程度適切な引用。ただし、引用の表現に不備があり、出典と自分の表現との区別が不明確。(2点)	どこにどの文献からの引用を行っているのかが、判断しにくい。(1点)	本文中の引用・出典記載がない。(0点)
	章立て(全4~6章)	説得力を高めることを意識した章・節が構成されている。(4点)	ある程度妥当な章・節の構成になっている。(2点)	章・節を作っているが、形式的のようなセクションにするかの意図が感じられない。(1点)	章・節の構成を考えた形跡がない。(0点)
題・見出し	適切なタイトル、見出しを考えている。(4点)	ある程度適切なタイトル、見出しを考えている。(2点)	タイトルや見出しに工夫が必要な箇所が多い。(1点)	タイトル・見出しをつけていない。(0点)	

※著しい不備や違反がある場合は、レポートを受理しない。 ※テーマと関係が薄い、あるいは、無関係のレポートについては、全体の点数から50~100%減で採点する。

／100点